



けている。
山口さんは江府町で生まれ育った。成人して町を出たことはあったが、結婚してまた地元に戻ってきた。集落のおじいちゃんおばあちゃんは、小学校のころに同級生だったお父さんお母さんで、そのために親しみも深いのだという。このスーパーあいきょうで働きながら、地域のコミュニティーを支えている。

移動販売車では、おばあちゃんたちが世間話をしながら楽しそうに買い物をしていく。中には買い物かごを一杯にして買っていくおばあちゃんもいて、「孫に買ってやるだけえ」とうれしそうに話す。山口さんはレジを打ち終えると、移動販売車から出て買い物袋を持つのを手伝いながら、家々に帰っていくおばあちゃんたちを見送る。

こういった光景が地域の日常になったのも、経営者である安達享司さんが、地元スーパーの倒産を引き受けたことから始まった。



江府町の山あいまで出かける移動販売車

人と人を繋ぐ 移動販売

「今日は町内会の運動会があるから、午前中には準備しているのかもしれないあ」
移動販売車の中で山口純子さんがそんなことをつぶやく。場所は江府町、地元では当たり前の光景になった、スーパーあいきょうのひまわり号の移動販売。新鮮な魚や日用品をトラックに載せて、山深い集落まで週に2回は訪ねて行く。

狭い集落道に入ると、トラックからコーヒールンバが流れ出す。山口さんのマイクでの呼びかけに出来るように、家々から買い物袋を持ったおばあちゃんが集まってくる。集落の決まった場所にトラックを止めて、お店の準備ができたころには、お

ばあちゃんは何人かで世間話に花を咲かせている。移動販売車はひとつのコミュニティーだ。

■地域の見守り

山口さんは、集落のひとりひとりと話をしながら、今日はあそこのおばあちゃんが来られなかった、足の悪いおばあちゃんのところはこの前頼まれた乾電池を持って行ってあげよう、といった世話を焼いている。集落全体が頭に入っているのだから、この日行われる町内の運動会を楽しみにしているおじいちゃんやおばあちゃんの姿を思い浮かべ、商品を並べている。本当の意味で、地域を見守り続

「スーパーあいきょう」の
移動販売車の事例



買い物客と世間話をする山口さん。地域を移動販売車から見守っている

店とは考えていない。それは、ひとつのコミュニティであり、買い物を楽しみ、地域の食を支える場所であると考えていて、冷蔵機能のある5台の移動販売車には、この姿勢が反映されている。

「やっぱり新鮮なおいしい魚が食べたいじゃないですか。これひとつの武器ですよ」と安達さんは笑いながら話す。大手のスーパーではまねできない、顔の見える顧客に届ける商品の



■スーパーの倒産と大きな決断

1990年に、地元の大きなスーパーのひとつである生協が倒産した。これを何とかしたいと立ち上がったのが安達さんだった。元従業員と一緒に「せいきょう」を「文字だけ変えて、同じ場所でスーパー」「あいきょう」を立ち上げた。だが、地元には他にも大きなスーパー



車内は広く、世間話に花が咲くこともある

があることや、これまでと同じような経営では立ち行かなくなることは目に見えていた。そんな状況を打破するため、地域に自分たちで御用聞きをする、移動販売というやり方に生き残りを賭けた。これが、山間地の多い江府町に適応し、今では売上の25%を移動販売が上げるようになった。新しいビジネスモデル

仕入れは、安達さんにとって楽しみであるように見えた。

■人口の減少と増える役割

江府町を取り巻く状況は厳しい。人口は3500人を割り込み、日野郡内にあった大手のスーパーも姿を消した。そんな環境の中で、自分たちにできることは何か、安達さんは常に行動に移してきた。

江府町に唯一あるコンビニエンスストアも、安達さんが経営する店舗のひとつだが、全国で初めてコンビニエンスストア商品を移動販売した。地域でパンや総菜の安定供給が、可能になった。

2008年には、行政と連携した「中山間集落見守り活動支援事業」に参画。そんな地域に寄り添う仕事が評価され、同年には地域づくり総務大臣表彰を受賞した。早稲田大学の学生団体「つなぎ屋A i T i e（あいたい）」との交流もこの年から続いており、毎年東京から学生が江府町にインターンシップに来ている。

2010年からは、地元の日野病院と連携し、移動販売に合

ルの始まりだった。

安達さんの朝は早い。まだ日の昇らないうちから境港に保冷車で出かけ、その日水揚げされた新鮮な魚を市場で直接買い付ける。これをスーパーまで運び、切り身や刺し身にされた旬の魚は、朝のうちに移動販売車に載せられ、山間部のおばあちゃんたちの元に届く。

■買い物の楽しみ、地域の食を支える場所

安達さんはスーパーをただの



新鮮な魚も冷蔵庫で販売



買い物客は高齢者が多いので、店員がサポートしてくれる



移動販売車について

大型の3トントラックを改造した「ひまわり号」(=写真)1台と、1.5トントラック2台、軽トラック2台を保有。販売エリアに合わせて車を使い分けているが、どの車両にも冷蔵庫が備え付けてあり、中山間地でもその日の朝に水揚げされた魚を買うことができる。生活用品から雑貨、コンビニ商品まで取りそろえ、各戸を回りながら「御用聞き」に向う。ひまわり号では、冷凍冷蔵庫を常備するほか、大人がすれ違うことのできるほどのスペースがあり、ご近所同士車内で顔を合わせると、世間話に花が咲く。



地域の人が運営し、地域の人が店を支えている

府町で必死になって続けてきたこの「移動販売」という取り組みが、全国に波及することを願っている。
 「地域の人が地域の店を守るのは当たり前のこと」。それが安達さんの経営哲学のように聞

こえた。自分たちの地域は自分たちで守る。その深い矜持（きょうじ）が、この手間も苦勞も多い移動販売を支え続けてきた。「ここまで続けてこられたのは、やっぱり地域の人が好きだから」と安達さんはちよっ

とはにかんでみせたが、多分それが本心だろう。
 移動販売がつなぐ人と人の絆。鳥取県らしい顔の見えるネットワークが、そこには確かにある。

わせて健康診断を行う「看護の宅配便」を始めた。日野病院の看護師が同行し、買い物に来た高齢者の問診や健康診断をするこの取り組みは、全国からも注

目されている。

■「やっぱり地域の人が好きだから」



「選ぶ楽しみ」をあいきょうが地域の人に運んでいる



ここまでの取り組みを安達さんは「ビジネスじゃないかもしれない」と振り返る。「ある意味で生活支援や交流促進をやっているのは、ほとんど行政の代わりをやっているようなもの」と笑う。
 ひと月に2、3件は行政や大学、民間企業からの視察を受け入れ続けているのには、訳があるという。「自分のやってきたことを引き継いで欲しい」。江



安達商事(屋号・あいきょう)

〈概要〉 ●所在地:日野郡日野町根雨629
 ●代表者:安達享司
 ●店舗:あいきょう4店、ローソン江府店1店、
 移動販売車5台(3トン車1台、1.5トン車2台、軽トラ2台)
 TEL 0859-75-2328 FAX 0859-75-2243



代表者のコメント

代表取締役 安達享司さん

地域のスーパーとして人が集まる場所、食を支える店として地域の人のために移動販売を行っている。買い物客はお年寄りが中心なので、移動が不便な人にも商品を見る喜び、選ぶ楽しみ、集まれる場所を提供したい。ビジネスというより地域貢献の要素が強く、全集落

を回ることに意味があると思っている。従業員は地元で雇用している。地域の人が地域の店を守るのは当たり前のこと。地域の人が好きだから、ここまで続けてこられた。地域の人に愛されるスーパーでありたいと思っている。